

サイトサイト

佐々木 佳子 青森

サイトサイト感染者数が今日最多あさがほの花夏にふるへる
ひまはりの二十五本が蓄もつ何はともあれ着実に夏

「太陽は五十億年後に果てる」一瞬われは途方にくれて
オーロラを見に行きたいといふ夢は一パーセントも諦めてゐない
オーロラをスマホの画面にくりひろげ心を放つ夏夕まぐれ

ねむりの輪郭

島 本 ちひろ*埼玉

猫の腿三指で押せばふよとしてこれはねむりの輪郭である
肉球のない人間は不憫だと茶トラの雄に哀れまれおり
はすのはなみずのうえなりはすのはなまるいはっばもみえております
短冊を書くことのない七夕は初めてだった令和三年
愛情という語が苦手ねむりきることのできない夏の真夜中

無理せずに

中津川 勸 坐 埼玉

組合の書記長わたし委員長は益川敏英 意気たかかりき
クオーク視る目をもつ益川敏英が見舞ひにくれた「名画を見る目」
三千の人の死ぬけふ翩翻とオリンピックの旗ひるがへる

無理してもできぬ槍投げ無理せずにできる投げ遣り 力まず生きる
高潔な（平和の祭典）そこでさへ人は金、銀、銅を争ふ

アイヌの地

豊島秀範 千葉

ゆるやかな下り道をいふ（モエルラン）室蘭いまも海へとくだる
札幌は（サットポロ）とふアイヌ語の乾燥したる広大な土地
イラクサの生える地をいふ（モセウシ）に妹背牛あてし心しのぼる
（フラヌイ）はイオウの臭気ただよふ地ラベンダー咲く富良野のむかし
（サラペツ）は葦しげる土地 更別の村の名ゆゑか人減りやまず

わたしはふくろ

斎藤美衣 神奈川

あたらしき愉快をぼんと生みさうな源平池のあをき蓮の実
本日のわたしはふくろ時折は口をゆるめて息を吐くなり
言葉なんぞじやまだじやまだと思ふ日は息を浅くし地下道通る
ばあちやんの住む延岡は繊維の町レーヨン行きのバスに乗りこむ
サンダルの平らかな音に続きたる小さく冷たい犬の足音

傘を合はせて

山下佐保 新潟

気づいたらぜんぶ白髪になつてゐた夢で目覚める八月五日
「狼煙」には「狼」が棲むその訳を漫画オタクの吾子に教はる
面談で「素朴」と言はれたる吾子よ「素朴」はいづこ横顔眺む
降り止まぬ雨の中なる墓参り傘を合はせて線香灯す
和歌・芸能上達祈願の御守を貰ひてうれし益明けの職場

「ひさしぶりのバツハ」

勝山和美*富山

わが恃む人もいつしか老いたり夏の終わりの夕風つのもる
四枚も切手が貼られ届きたりこれも終活友の手紙は
逝く夏の後ろ姿を追いかけるひとり挽歌をうたう夜には
まどろみののち鎮まれるわがこころ真昼の月のしずけさのように
籐椅子に深く腰かけ読み返す「ひさしぶりのバツハ」雨降る午後を

聖火ともりぬ

今井由美子 岐阜

コロナ禍もくすぶる戦火も無きごとく聖火ともりぬ二〇二一 夏
冷房の風にサヤサヤ揺れあひて波恋ふやうなモビールの魚
垂直にひかり降りくる日盛りにゆらりと眩し白きバラソル
のびやかに十指すべらせ鍵盤に少女は晩夏のひかり遊ばす
体温を越えし気温の真昼間を団扇かたどるハガキがとどく

この未来、この過去

山田恵里 愛知

捨てるほど「女」を持つてをらぬ我ベディキュアの爪ざくざくと切る
この未来あの未来もう選べぬがこの過去あの過去澄まして佇てり
右肩から目覚めた朝は斜交ひにうつつに入りて「はい」と言へない
雨粒は水面に触れるまでの生 人にもあらむ触れしよのちの生
右頬のまぐらの跡が消えなくて花柄マスクの頼もしき朝

くちびるを噛む

吉本由美 大阪

熱おびて樹は紅葉づるや接種のち紅くれなるひらくモデルナアーム
歌詠めば眠くなる癖ほんたうは何が望みか曖昧なまま
つらつらと○まるをつけつつ読む歌集思惟のしやぼん玉ふくらみて消ゆ
炎天に向きて花咲く姫女苑の強さ持たねばくちびるを噛む
デネブ冴え翼ひろぐる白鳥座見えぬ大阪の北天あふぐ

無観客五輪

鮎川清 山口

こつそりと聖火リレーは引き継がるオリンピックの恥部のごとくに
客のなきアトラクションの闇深しつひに始まる東京五輪
世界中のマスクの形、色を見つテレビの五輪入場行進に
婚礼の新婦の父を思はする開会式の首相の託ち顔
君が代は哀歌と聞こえ日の丸は半旗とも見ゆ無観客五輪

竹山

梶原道幸 熊本

われの子の偏平足に父はゐて死んでゐませんビルマなんかで
ご気分ご気分のすぐれぬわれと鉢合はせ淘汰されたる土蜘蛛あはれ
竹山は竹が犇めき窮屈なり竹の子掘りに入りし竹山
季ながく野に咲きつぎて盂蘭盆の姫女苑あはれ花に翳りあり
カーブミラーの支柱の脇に網を張りてオオコガネグモ食事の最中